

東工大の女性研究者たち

Part II

前号に引き続き、東工大内の女性研究者を訪ねました。今回は数学科の宮岡礼子助手です。前回は情報科学科の寶来正子助教授でしたので、今回は工学部の方を、という考えがあったのですが、工学部には女性の方が非常に少なく、あきらめました。実験のない数学関係は、体力的に見て比較的女性にやりやすいとい

うことのあらわれでしょうか。

宮岡助手は、東工大、同大学院を経て、今は母校の助手をしていらっしゃるという私達の先輩です。そして、家庭では3児の母親をつとめ、大学では助手として専門の微分幾何学の研究の他、演習の指導をするという一人二役をこなす毎日を送っておられます。

宮岡先生の東工大生活の思い出

——先生は学生のころから東工大にいらっしゃるんですね。

ちょうど20年前に入学し、それ以来ずっとここにいます。

——そのころも女子学生は少なかったのですか。

私と同期は5人でした。今の50人というのは信じられません。だけど私の2年前程までは1人か2人で、その頃に比べれば5人というのは多かったですね。私たちのあとしばらくたってやっと、2ケタになりました。

——学生時代、女性で良かったことは。

5人くらいでは無視されて。別に「女性で良かった」と思ったことはありません。男女一緒にの体育が一番嫌だったのが長距離走。私たちの頃は体育の時間1人でしたから、バレーボールなどをやっても相手になら

ない。だから体育は好きではありませんでした。

他の授業にしても、教授が名前を覚えてくれるくらいで特に良かったことはありませんでした。少なすぎるのも良くないと思います。やはり男性に対するより、女性どうしの方がライバル意識を感じるものですから。少なすぎると、せり合って能力を高めあうということがなくて、甘えた環境になっていると思います。

——学部生のときの次にくるのは研究室の思い出だと思いますが、先輩として研究室所属の際のアドバイスを頂けますか。3年生ぐらいで自分のやりたいことは見えてくるものではないでしょうか。

見えてこないですね。よく分からないでしょう。まして、どの研究室がどういうことをしているのかというのは、よほどの人でないと分から



宮岡礼子助手

ない。だから、分かってとすることが大事です。先輩にきくなどして。どういう基準で選べば間違いない、ということは分かりません。先生との相性や、研究室の人との相性などの人間関係で選ぶとか…。もちろん自分で、これが面白そうだからやりたい、というものがあればそれを選ぶのが1番です。

——大学院へ行く時点で他の大学へ行こうと思いませんでしたか。

思いましたね。だけど色々な事情があってできなかった。今にして思うと、大学院か就職のときに外へ出た方が良かったですね。やはり、外の空気を吸った方が刺激が多くていいのでは。

男女差を生じさせるのもなくすのも自分次第

——よく言われることですが、男性に比べて女性は理論的に考えることが苦手だとか、感情的だとかいうことはあるのでしょうか。

あるかもしれないけど、それは個人の問題でしょう。例えば、家にい

ると感情的になってしまう。仕事などで社会に出るとやはり感情をおさえてはならない。だから、男性は理性的にならざるを得ないでしょう。男性でもずっと家にいると、感情的になりますよ。

——実際に、大学院のときや助手をなさっているときに差別を感じましたか。

個人的には全然感じませんが、最近、一般的には感じます。例えば、男女で全く同じ能力を持っている場合、男性の方が地位が上になっています。でも、大変優秀な人ならば、男女関係なく認められます。それは絶対確かです。

友人で、大学を出てすぐ会社に勤

めて2年ぐらいは同期の男性と同じ給料だったのが、3年目に差がついていて、その人は会社を辞めてしまいました。本人にこれだけやった、という自負心があるなら、そのところでがつくりするでしょうね。本人に自負心がないなら気にならないでしょうが。

——同じようにやりたかったら、何倍もやらなくてはならないということですか。

女性だから良い方へいく、ということもたまにはあると思いますが。今でも、男性は一家を支えるというイメージがあるから、企業の側でも心情として男性を採ってあげよう、ということはあるかもしれない。でも、それを凌ぐほどの能力は女性にもあると思う。社会の事情も随分良くなってきているのでは。活躍している女性も増えていますし。

仕事と家庭の両立は工夫すれば可能

——仕事をしていて大変なことはありますか。

私の場合は、育児が一番大変でした。他の人と比べて7、8年のハンデもつきましたし、やっとこれから仕事に打ちこめるというところです。

育児というのは楽しくて、私の場合そちらにウエイトをおいてしまいました。でも面白い時期というのは3、4年で、それを過ぎると育児だけに埋没するのが嫌になってくる。そのとき、私には仕事があったからすごく良かった。だから、色々大変なことがあっても仕事を続けてきて良かったと思います。

女性もこれからは一生続けられる仕事、一生興味のもてることをやれる時代でしょう。社会状況も変わってきたし、家事も楽になったし。25歳くらいから30歳くらいまでという時期は色々吸収しなければならないときだから、単に家庭に入って家事、育児をするというよりも、したいことをある程度してキャリアを積んでおいた方が後の人生も豊かになるでしょうね。

聞いた話なのでですけど、男性は企業に勤めて定年になると産業廃棄

物と言われるけれども、女性の場合是不燃ゴミと言われるそうね。それはどういう意味かというと、自分で何かをしたという充実感を持たずに60歳（男性の定年の頃）をむかえてしまうということなのね。そういうことではいけないと思う。別に仕事じゃなくて趣味でもいいのですけれど、不燃ゴミにならないよう自分ですることを持って燃焼しなくては。

——子供ができたから会社を辞めるという考えをどう思いますか。

私の場合、数学の助手というのが時間的に融通がきくから続けられたという面もあります。会社勤めで朝から5時までだったらやめていたと思います。親だったら誰でも、最低1年、理想をいえば2年ぐらゐ育児に専念する機会が欲しいのです。ですから、あながちにそういう考えを否定しないけれども、やはり、先にも言ったようにある時期を過ぎたときに仕事を持っていた方がいいと思う。そのために、育児休暇の制度がもっとしっかりしてほしい。休暇の間は無給でもいいから、休暇が終われば働ける状況が必要です。子供ができたから会社を辞めるという考えは

制度がきちんと決まればなくなるでしょう。

——夫婦間の分業についてはどのようにされていますか。

育児に関しては、小さい子には女性の手が絶対必要ですから、男女の分業はできません。3人の子供のうち、上2人は幼稚園で、下の子は保育園に入れたのですけれど、働いているなら保育園の方がいいですね。もっと早く入れていれば…。と思います。だから、女性の負担になることは男性が、というのではなく、保育の専門家と分業するというように考えた方がうまくいきます。仕事をしていて子供を放っておいていいのかという束縛感もあったけれど、専門家に任すということは手を抜くとは違って女性のロスを少なくさせると思います。

最近、子供から手が離れて、男性でもできるような、食事の支度、掃除、洗濯などは夫婦間で分業できるようになってきました。

分業といっても、女性が仕事が面白すぎて子供を放り出しておくところまでいくと問題ね。そのへんを自然にやればいいわね。そのためには、仕事が忙しくてイライラしたまま家に帰るということもないように仕事に余裕をもってすることでしょう。今は、ゆとりということで休みも増えて恵まれてきているけれど、企業側の配慮というのは必要でしょう。

先生はその他にも色々と興味深い話をして下さいました。演習を受け持っている先生はそのときの東工大生の様子を見て次のようにおっしっ

いました。

「真面目によくやっているとは思いますが、決められたことはきちんとやるけどそれ以上はやらないのね。講義より先走ると、『まだやっていません。』と言う。自分で少しやるとかの姿勢は欲しいわね」

すべての人があてはまるとは思いませんが、大学生一般の傾向を表した言葉でしょう。女性としての先生でなく、先輩として、教師としての先生の言葉をしっかり受けとめなければならぬと思います。

2回の取材を通して感じたのは、両先生がともにしっかりした考えをお持ちになっている、ということでした。やはり、独自の研究をするためには、自分というものを確立しておかなければならないのでしょう。また、お二人に共通なこととして、研究が楽しいということがありました。自分のやっていることに興味を持てなくては意味がない、頭の良し悪しよりも興味を持つか持たないかで研究内容の良さが変わってくる、といったことが話の中に出てきました。しかし、今の時期（学部3年くらいまで）は土台となる勉強だからあまり面白いと思わなくても、どれもしっかり学んでおいた方がいいでしょう。という言葉もありました。

もう1つ感じたことは、社会が変わってきている、ということです。

変わってきてはいますが、まだ「女性は家に」という考えは残っているのでしょう。取材中にも、こういう企画自体、女性の社会進出が珍しい証処ではないか、というような声もあがりました。女性が働いているのがもっと自然になるためには、もちろん社会も変わっていかなくてははいけないでしょうが、女性自身の意識も変えなくてはならないでしょう。

両方の取材とも、最後は大学生活の話などの雑談へと話が広がり、先生の方からこちらへ質問が出てくる和やかな雰囲気となりました。忙しい中、時間を割いて下さった先生方に感謝します。

（磯田）

